

スタール夫人『ルソーについての書簡』

永田, 英一

<https://doi.org/10.15017/2332989>

出版情報 : 文學研究. 36, pp.101-122, 1948-03-30. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

スタール夫人『ルソーについての書簡』

永田英一

マダム・ド・スタール¹⁾というより政治家ネッケルの一人娘アンヌルイズジェルメーヌは、いわば二人の父をもつてゐた。一人はほんとうの父ジャック・ネッケル³⁾で、もう一人は文學上の父ジャン・ジャック・ルソー⁴⁾であつた。そしてこの二人はどちらもジュネーヴ共和国の出身で、活動の舞臺はちがうけれど、フランス十八世紀の主要人物であつた。ロマネスクで感激やのジェルメーヌはこの二人の父にまつたく偶像崇拜的な熱誠をさへげてゐた。また人のよい、素直な、生一本のかの女はそれをなんの悪びれもなく表現した。一七八一年、有名なネッケルの「歳計報告書」⁵⁾の出たとき、作者に禮讚の書簡をおくつたのはかの女であつた。『ルソーについての書簡』もまた、かの女が文學の炬火をうけついで人への熱烈な讃歌である。

まだルソーの讃辭がない、わたしはわたしの賞讃が表現されたのを見たいと思つた。わたしはおそらく誰かほかの人がわたしの感じてゐることを描いてくれたらと願つたであらう。けれどもわたしはわたしの感激と印象を自分で跡づけながら若干よるこびを感じた。わたしは天才というものは少數のすぐれた精神によつてしか理解されないものだとしても、せめて感謝の眞物はそつくり受けとるべきだと思つた。人類の幸福がその目的である作物はその作者を、そ

の行動が不滅にする人々の列におくべきものだ。……

……見合せてゐて、そしてわたしちに迫る感情の表現を、不確かな將來の時期に追いやることにどうして賛成できよう。……その上ひとがルソーに深甚の感謝を負うてゐるのは青春時代ではないか。……（序文）

スタール夫人はよくルソーの娘だといわれる。それはいろんな意味で正しい。けれどもこの『書簡』においてほかの女がそうであるところはない。

- 1) Madame de Staël (1766—1817)
- 2) Anne-Louise-Germaine
- 3) Jacques Necker (1732—1804) 革命當時の財務總監。
- 4) Jean-Jacques Rousseau (1712—1778)
- 5) le *Compte-rendu* (1781) 政府財政の機密を暴露した異例の書。

* *Lettres sur Rousseau* 正しくは *Lettres sur les écrits et le caractère de J.-J. o sseau* (1788)

『ルソーについての書簡』の書かれたのは一七八八年、ちやうどルソーの歿後十年にあたる。作者はその二年前にパリ駐劄スエーデン大使スタール・ホルスタイン男爵*と結婚してゐた。そしてこの結婚は周知のやうに幸福なものとはならなかつたけれど、まだこのころは何といつても新しい生活で、不幸のうかどう餘地もなかつたし、當の夫人はまだ二十二歳の若さで、おそらく情熱の文學少女そのまゝであつたらう。ジェルメーンは裕福で高尚な、何からいつても申し分のない家庭に生まれ、やさしい両親の自由で賢明な教育をうけ、早くから自家のサロンに顔を出して一流の

文人たちと接觸した。かの女は幼年時代をもたないほどに早熟な、聰慧な、潤達な娘であつた。そしていまは外國使臣の若夫人となり、こんどは自分でサロンをひらき、輝かしいその女王であつた。いわば生誕以來のあまりに祝福された眞直なのぼり道の頂點に、かの女はゐたのであつて、持前のサンチマンタルのほかには何の憂愁も知らず、人生の陥穽の一つをも疑わず、たゞ純粹で樂天的で、若さと社交に夢中だつた。そしてかの女の理性的な、思想的な、いわばブルテールの半面もまだあまり發達してはゐなかつた。したがつてこの『書簡』の作者は、年代的にみても、およそ作家スタール夫人のありうるかぎり、感情の大司祭の娘であつたといわねばならない。

* Le baron Stael-Holstein (1749-1802)

書簡 一 ルソーの文體について、また科學、身分の不等、および

演劇の危險に關する初期の論說について

ルソーはあまりに強烈な感受性をもつてゐた。一度ものゝ印象をうけると、かれの全魂はその焰にやかれ、かれの全精神は無數の想念に壓倒される。ルソーは觀念を整理し、構想をねり、それを筆にうつすためには、この熱火のしづまるのを待たねばならない。こうしたルソーの流儀は、かれ自身もしばしば告白してゐるし、いまは評家の常識となつてゐる。同じく感受性のつよい夫人がまづこのことに注意して、こゝから書きはじめたのは當然といわねばならない。

ルソーが最初に取扱つた問題は、科學藝術の効用についてであつた。一七四九年の夏、ルソーはパリからヴンサンヌへ友人ディドロを慰問に出かけ、その道中はからずもディジョンのアカデミーの懸賞課題をみつめて、「科學藝術論」をものし、一躍ヨーロッパの思想界に乗出したのだつた。――

* *Discours sur les sciences et les arts* (1750)

科學藝術のやうな知的作物は、もとゞ人間の惡徳から發生したもので、それらの進歩は道德の腐敗の根本原因だとルソーは主張した。夫人はまづルソーのこの意見はたしかに逆説だという。そしてまたルソーが人類を復歸させようとしたあの自然状態、未開の不便からも文明の不都合からも均しく遠ざかつた黄金時代、これもたしかに幻想だという。けれども、

煉金術師は、哲學の石をもとめて、眞に有益な祕密を發見した。ルソーも同様に、完全な幸福の認識に達しようとする、その途上で多くの重要な眞理を見出したのだ。

と夫人はいう。これはルソーの方法の根本的な利點をついたものだ。ルソーはまづ自然、*la Nature* というものを絶對の完全性として想定し、そしてそれに向う線にそつて物事を考えてゆき、そうしながら、多くの謬見とともに、多くの眞實を發見したのであつた。したがつてルソーの場合、その理想の内容やまたその實現性について、とやかく論じることとは所詮ヤボであらう。

つぎに夫人は諸帝國の衰微は政治的變革の必然の結果であつて、學問の進歩をその原因とみるのは間違ひであらう、ルソーは人間の幸福と諸帝國の繁榮とを十分に區別してゐないやうだという。

なぜなら知識愛がたとえ尙武の國民を軍事的情熱からそれさせたというのが眞實だとしても、人類の幸福はそのために失うところはなかつたであらうから。

こゝにも夫人一流の考え方がみられる。夫人は知識への信頼からも、またルソーとは別な博愛思想からもフランス十八世紀の子であつた。

ルソーの第二の論説は人間不平等の起源についてであつた。一七五三年ルソーはまた同じアカデミーの懸賞に應じて「不平等論」を書き、これをジュネーヴ共和國に献じた。このたびは賞を逸したけれど、成功はさらに大きかつた。

* *Discours sur l'inégalité* (1755)

夫人はルソーの著作中この作にはもつとも多くの思想がもられてゐる、そしてこのやうに自然的本能の處理を手段とすることは、天才の偉大な努力であつたという。そして、

各ページにルソーがいかに原始生活を追慕してゐるかがみられる。かれは独自の厭人癖をもつてゐた、かれの憎悪してゐたのは人間ではなく、その制度であつた。

という。これもまたルソーの根本思想をついたものだ。人間が悪いのではない。悪いのは制度だ。一切の社會悪は制度にある。ルソーの文句を引用しよう。

地面に圍いをして、これはおれのだ」と抜目なくいつて、そしてそれを信じるほど單純な人々を見出した最初のもの

が、市民社會の眞の創始者だつた。枕をひきぬき、あるひは溝をうづめて、その同胞にこの山師のいうことをきいてはいけない、果實は萬人のものであり、土地は何人のもでもないということを忘れるならば、諸君は破滅だ！と叫ぶやうな人があつたら、その人は何と多くの戦争を、殺戮を、何と多くの悲惨と恐怖を人類に免れさせなかつたらうか。(第二部)

凡庸人は自分の上にあるものも、下にあるものも見ない。かれらは自分の線に固定してゐる。が、ルソーの非凡な知的想像力は、一切の歴史をこえて、人間性の根元において働いた。夫人はこういう風にものを考えねばならぬ天才の不幸に同情してゐる。もつとも感じやすい、そしてその知識と天稟からもつともすぐれた人が、人間の心情と精神をほとんど愚鈍の状態に引きもどそうというのは注目すべきことだ、けれども、それはかれが行過ぎた文明の利便の感じさせる一切の痛苦を他の何人にもまして感じたからだ、崇高な才能の當然うけるべき大成功もおそらく幸福の犠牲においてえられるのであらうと夫人はいう。後年スタール夫人はすぐれた女性への孤獨感と悲哀にすいぶん悩まされる人だつた。そしてまた夫人は、誇張されたこういう意見の中にあつても、ルソーがつねに悪徳への憎しみと美德への愛という正しい感情を鼓吹してゐるのを見逃さない。さらにルソーはその思想の實現を教えるものではなく、魂に働きかけて、そしてそうすることによつてまた根源にさかのぼる人だという。

さて夫人はこゝでルソーの文體について語る。ルソーの文章は周知のやうに熱烈な、多彩な、抑揚にとんだ美しいものだ。しかし夫人のそれについては同様にいうことはできない。夫人はルソーの文體の完成ということがしばしば

吹聴されるけれど、はたしてそういうことが正しい讃辭であらうかと自問し、

完成は、大きな美點の存在よりも、缺點の缺如にあるやうだ。奔放よりも、節度に、時々あらわれるものよりも、常にあるものに。要するに完成は偉大よりも均衡の感をあたえる。

という。夫人のこの説はルソーの問題と切離して考えてもよい。というのは夫人自身が完成のわからない人、といつて悪ければ、すくなくとも完成に窮屈を感じる人なのだ。夫人は古代文學を解さず、十七世紀のフランス文學にも愛著せず、北歐の無限定、茫漠、憂愁、要するに未完成なものに走るのであつた。

そういう傾向からか、夫人はルソーの筆致の完成を上下する抑揚と灼きつくすやうな熱力に注目してゐる。語彙の豊富や幾何學的構成の簡潔も文章に完全な明快さをあたえるけれど、ルソーの表現の魅力はその魂に負うてゐる。ビュフォン^{*}は想像でその文章を彩るが、ルソーはその魂で、その性格で活氣づける。だから、ほとんどつねに、また多くの題材について、愛とか憎しみとか、その他の情念の昂奮の吹きこむ熱氣をルソーにみとめること以上に、ルソーにたいする美しい讃辭があるうかと夫人はいう。そしてルソーの往々まぬがれなかつた悪趣味についても、ルソーは一種の共和的精神から、下等な言葉とか、上等な言葉とか、用語のあいだに階級の存することを認めたくなかつたのだ、また規則にしたがう術を知つてゐて、それを破る人は、すくなくとも規則にしたがう能力のないために批難されることはないといふ。——いかにルソーの娘らしい——微笑しい言葉だ。またこゝにはロマンチスムのための批評の提案者としての夫人の姿がみられるだらう。

* Buffon (1707-1788) 「文章論」 *Discours sur le style* (1753) の作者。

最後に夫人をもつとも感動させた論説は、一七五八年公にされた「演劇についてダランベールにあたる書簡」*と
 うのであつた。その前年末、ダランベール¹⁾は「百科全書」²⁾のジュネーヴの項で、この新教の地に劇場の設立せらる
 べきことを要望したのであつた。これにはフルテルの助言もあつたといわれる。ルソーはこのことを知ると、モン
 モランシーの草屋で、死のまぼろしに憑かれながらも、一氣に反駁文を書きあげて、そして演劇の害毒から郷國の美
 風を守らうとしたのであつた。――

* *Lettre à D'Alembert sur les spectacles* (1758)

1) *D'Alembert* (717—1783)

2) *Encyclopédie* (1751—1772)

3) *Voltaire* (1694—1778) このころ既にルソーと不仲であつた。

夫人はまづルソーがこれほどの威厳をもつて立ちあらわれたことはない、祖國への愛、自由への熱狂、道義への執
 着が、かれの思想を導き、活氣づけてゐるといふ。そして、

かれの主張する論旨は、ことにジュネーヴに適用されると、完全に正しい。かれが往々パラドクスを主張するに用い
 るあらゆる才智も、この作物では眞理を支えるのに充てられてゐる。かれのいかなる努力も、いかなる感動も、見當
 はづれではない。

と夫人はほとんど無條件に替同し、ルソーの愛郷心を讃えてゐる。ジュネーヴは夫人にとつてもまた、なつかしい故
 國であつた。――

けれども、小さいときから芝居が好きで、社交、愛、名譽にあこがれる女性にとつて、ルソーの所説はことごとく満足すべきものではない。

女性の名において、わたしがルソーに批難したい唯一の過誤は、それは……女性は熱と眞實をもつて情欲を描くことは決してできないといつたことだ。

空虚な文學的才能を、女性にこぼむのはよい。しかし女性は冷やかにしか書けないとか、愛を描くすべを知らないとかいうのはどうか。女性がすぐれてゐるのは、魂、*l'âme* からだ、魂のみだ。女性の精神に躍動をあたえるのも、女性をして愛するものゝ運命に合一させるのも、また學識經驗のかわりをするのも、魂なのだ。それなのに、*クサフオ*のみが、すべての女性の中で、愛に語りせることができた^クとルソーはいう。この言葉はかなり夫人を刺戟したらしい。女性が魂をこめて愛を描くならば、

この崇高な信従、このメランコリックな苦惱、女性を生かしもし、殺しもするこの全能の感情は、おそらく詩人のたかぶつた想像から生れる一切の昂奮よりも、ずつと深く讀者の胸に感動をもたらすだらう。

と夫人はいう。——後年、夫人のいとこソーシユール夫人も^クかの女は藝術作品を書くというより、魂の中にもつてゐたものを表現したのだ^クといつてゐる。

* *Madame de Staëure* (1766—1846)

引用の句はスタール夫人全集(一八七一年版)の解説による。

「新エロイーズ」*はフランス中世の神學者アペラールと尼僧エロイーズとの故事にちなんだ書簡體の戀愛小説。その制作の動機、感興からいつてもルソーの作中もつとも文學的な、いわば純粹なものだ。——貴族の娘ジュリーと家庭教師サン・ブルーは相思の仲になつたが、ジュリーは父の意にしたがつて某男爵と結婚し、サン・ブルーは漂遊の旅にでる。ジュリーは貞節な妻として夫につかえ、二兒の母となる。が、昔日の愛に苦しみ、それを夫に打明けける。夫は妻を信じ、サン・ブルーを館へ呼びよせる。そして平和にくらしてゐたが、まもなく二人のこゝろに危機がおとづれる。とその時ジュリーは湖におちた子供を救ひ、自分は病いをえて他界する。——斬新な感受性、あふれる抒情、愛、憂愁、諦感、まだ美しい自然、徳義への熱狂。一七六一年この書が公にされると、たちまち感激の渦がまき起つた。ことに女性の間。——

* *La Nouvelle Héloïse* (1761)

夫人もこれにはよほど感激したらしい。わたしは作者の才能よりもわたしの魂の傾向に歸せらるべき感激から身を守ることに努めよう、わたしはわたしのうけた印象からすこし離れて、時がわたしの心情を老いさせてからするやうに、「エロイーズ」について書こう、と夫人は前置してゐる。——

「新エロイーズ」は都下の子女をあんなに熱狂させただけに、また多くの識者の批難をうけた。夫人はその批難を一應みとめながらも、作者ルソーのために辯護の勞をおしまない。

ルソーの意圖するところは道德の鼓吹と擁護にある。いまだ純潔な若い娘にこの小説は、あるひは悪影響をあたえ

るかも知れない。しかし、一方これを讀みおえて、人が美德への愛にいつそう燃えるならば、また自己の義務にいつそう執着するならば、ルソーは許されねばならない。

ルソーが戀愛をえらんだのは、愛のみがもつとも普遍的にひとの興味をひき、ひとの心をみたしうるからだ。ことにルソーのやうな人間精神に先行する人に導かれると、愛は強力にして有益な原動力となるものだ。

またルソーは自分に託された娘を誘惑する家庭教師を描いたと批難されるが、しかし打明けたところわたしは「新エロイズ」を讀みながらそんな反省はほとんど起らなかつた。ルソーはこうした關係を昔のエロイズ物語から借用したのにすぎない。

サン・ブルーは誘惑者のやうな言葉つきも主義ももつてゐない。サン・ブルーはいまもスイスに見られるあの平等の思想にみちてゐたのだ。サン・ブルーはジュリーと同年だつた。たがいに引きつけられて、かれらはわれにもあらず相目見えたのだ。サン・ブルーは眞實と愛のほか何の武器も用いなかつた。……

これに比べると、ジュリーの方はいさゝか過つてゐたかも知れない。しかしジュリーの悔恨とその後の生活はこれを償うに十分だ。それにルソーは、世にもつとも劇しいもの、情熱と美德との相刻ないしは結合を描きたかつたのだ。またおそくいつもの流儀で、ジュリーの不幸と父親の頑固な自尊心とを持出して、世の偏見と社會制度を攻撃しようとしたのだ。

ジュリーは自分の意に反して結婚し、尊敬によつてのみ夫につながり、心の底にいま一つの幸福の思ひ出と他の人

への愛をもつてゐる。生活の環境は、心をまぎらわす世の渦巻の中ではなく、静かな山間の館であつた。しかもジュリーは夫にあたる幸福によつて、子供にさづける教育によつて、また神への信頼の中に見出すなくさめによつて、幸福なのだ。この幸福は世のつねのそれではない。もつとメランコリックな、またはかない人生にもつとふさわしいものだ。そしてこの小説をモラルなものにしてゐるのは、美しく描かれたこのきよい感情なのだ。……それにしても、

ルソーの能辨と才能をどうして十分に賞讃しよう。この小説はまた何という作品だ！ この書の中にはあらゆる問題に關する何たる思想がばらまかれてゐることだらう！ ルソーは新しい事件をつぎつぎに工夫する想像力をもつてゐなかつたやうだ、けれども感情と思想がいかに情況の變化を補つてゐることだらう！

こうして夫人はルソーの辯護と賞讃に思はず紙敷をとられてしまふ。そしてやうやくその批評にうつる。——
ルソーはいつも自分が語るやうにジュリーに語らせてゐる。

けれども正直なところ、わたしはしばしばジュリーの中にルソーをみとめるのを好まない。わたしはそこに男の思想なら見たいけれども、性格はさたくない。……

夫人らしい率直な言葉だ。また、

かの女のサン・ブルーにたいする不斷の説教もわたしには見當はずれのやうに思われる。罪ぶかい女が美德を愛するのはよい、が、それを説くことは許されない。

こゝにも夫人らしい健康な良識がみられる。さらに、ジュリーは時々その情熱にメトードをおいてゐるが、しかし、

ありきたりの定規にしたがつて、ジュリーが情熱的でなくなれば、それだけ一層つましく見えるだろうと考えたのなら、ルソーの間違ひだ。こうした情熱の行過ぎそのものがかの女の辯解であつたに相異なる。

と夫人はいう。果して夫人は、いかなるメトードにも、グラメンールにも堪えられない人だつた。

それからもう一つ批難すべき點、それはジュリーのいとこクレールの冗談だ。これには趣味も優雅もない。

この種のものゝ完成に達するためには、もつとも繊細な検討が非とする一切のものを、文句なしに、排除するやうなあの本能をバリーで習得して來なければならぬ。

ある感情が眞實だかどうか、またある思想が正しいかどうか、そういうことの判断はひとの勝手だ。しかし、

冗談の効果をたしかに豫見するためには非常な社交の習慣をもたねばならない。

これはルソーの一番いたるところをついたものだ。と同時に夫人にとつてはもつとも得意なところだ。ルソーは社交の術を知らず、そのため幾度かにかい經驗をもつた。それは「懺悔録」*などでかれ自身しばしば告白してゐる。が、スタール夫人は小さいときから交際世界になれ、談話はかの女の靈感とまでいわれる。バリーと社交界の大きらいなルソー、そこでなければ日も夜もあけぬスタール夫人、こゝに兩者の重要な分岐點がある。

* *Les Confessions* (1782—1790)

その上ルソーは缺活に書くには世界中でもつとも不適當な人だつた。すべてのものがかれを深刻に感動させてしまつたのだ。

ルソーは苦惱と情熱のために生れた人だ。かれが歡喜の陽光と信じるものも、いつしか悲哀の雲にとざされてしま

う。だが、これは、

魂のもつとも烈しい感激を傳達するには、何という雄辯だろ、何という才能だろ！

と夫人はまたルソーの讚美にかえる。古代の作家に描かれる愛は、すべて運命觀や神の怒りに興をそがれてしまふ。近代の小説の魅力はヒロイズムと騎士道的ガラントリにすぎない。だが心の自由な傾きから生れる感情、繊細にして熱烈な感情、

その燃えるやうな動搖を表現できると信じた第一人者、それはルソーだ、またこれを證明した第一人者、それもルソーだ。

最後に、夫人はジュリーの手紙の一つにいゝ知れない感激をおぼえたという。それはいまわの際にジュリーがサン・ブルーに書き送つた手紙だ。……さらば、永遠にさらば、……かくも暗鬱な、かくもメランコリックな言葉……この手紙の一語々々がわたしの魂をもつとも生々しい感動でみたしたと夫人はいう。

「エロイズ」の項を読みおえて、われ／＼は不圖ルネ・カナの言葉を想い出した。^{*}——

「新エロイズ」、それは十八歳のかの女（スタール夫人）自身だ、またそれは、あゝ！四十歳の、五十歳の、頭怕をかぶつた太つちよの奥方になつた時の、かの女ともなるだろ。

* René Canat, *la littérature française au XIX^e siècle*, P. 11

書簡 三 「エミール」について

「エミール」^{*}は五卷からなる教育小説、有名な「サヴァ助祭の信仰告白」^{*}はその第四卷にある。ルソーはまづ、萬物は造物主の手を出るや善であるが、人間の手に入つて墮落する、といつて、獨特の自然教育を唱導した。――

* *Pemile* (1762)

** *la Profession de foi du vicairé sanoyard.*

人々はおまりにも自然的感情から遠ざかつてしまつた。世の偏見は自然の足跡を消してしまつた。引返してこの道を見つげるためには偉大な天才がなければならぬ。ルソーのこゝろみたのはこの崇高な天才の努力であつたと夫人はいふ。そして、この教育法を一々うなづきながら辿つてゆき、

危なげなく人間を知ること學ぶためには人間でなければならぬ。……

エミールは軍人でも、詩人でも、官吏でもない。人間だ、……

という。これもまたルソーの考え方の根本にふれたものだ。ルソーは何よりもまづ人間を人間そのものにおいて見る。わたしは人間だとか、わたしの語らねばならぬのは人間についてだとか、ルソーは口辭のやうにいう。舊制度末期の上流家庭に育つた女性が、このことをいうとは、夫人もかなりのルソー派であつたらしい。けれども、

わたしは自分の子供のためにルソーの方法にすっかり従うかどうかわからない。おそろくわたしの虚榮心は特定の身分のために育てあげるだらう、子供が早くから榮進するやうに。

と夫人はいら。夫人らしい正直な言葉だ。ルソーはまたエミールという子供の教育をのべながら、同時につよく母性愛を喚起した。乳母も侍女も有害無益だ。

奉仕されることは、暴君にする、が、愛されることは優しくする。母親と子供とどちらが多くルソーに感謝すべきだ
ある？

實際、夫人もいうやうに、ルソーの効績はむしろ世の母親たちにその神聖な義務と幸福をさとらせたことにある。

つぎにルソーの女子教育（第五卷）にうつる。エミールの相手ソフィーの項だ。——ソフィーもまた自然に則つてまづ女でなければならぬ。しかし、こんなに女性をその弱さの中に、いわば閉ぢこめておいて、自然を助けるといふのはどうか。女性には、

大きな魂の力が必要なのだ。しほしほ女性に愛するなかれという掟の課せられる國では、女性の情熱と運命は相反してある、……

女性を人間社會から遠ざけて育てることは、女性を無力にすることだ。愛のあらゆる權利、心情のあらゆる歡び、女性はこれを追求するだけの力をもたねばならない。ルソーの呈示した女性はあまりに弱い。貧しいゆえに愛人の前で尻ごみするとは。ルソーは、

どうして何ものよりも下位な、そうして愛するものに不實なソフィーをわれわれに示す氣になつたのだろう。……
どうして女性の手本となるべきものゝ身を辱して、女性の品位を汚すのだろう。あゝルソーよ、それは女性を知らぬ
というものだ。……

未來の女性解放論者は、このところ偶像にたいしてもかなり手きびしい。――

けれども、この作品の描寫には何という魅力があることか！ 思想には何という巧妙、何という大いさがあることか！ と夫人はまたルソーの才能に魅せられてしまう。――

ソフィーのこゝろを知らされたエミールは、みづから力を感じ、ソフィーの弱さを愛し、かの女を抱いて、その足下に伏す。

この魂をうばうやうな場面はしばしばわたしの念頭にうかんだ。ルソーはエロイズで悔恨のたゞかいとあやまちの陶醉にたかぶつた情熱を描いた。悔いもおそれとも知らぬこの二人の愛人の描寫もまた才能の偉大な努力である。

ひとは往々ルソーの誇張と誤つた熱情を指摘する。夫人もかれの流儀をすべて正しいと見たわけではない。またかれの感激にいつも動かされたわけではない。けれどもルソーは、

わたしにはいつも自然に思われた。かれは他の人たちとは異つてゐる。しかもかれの語つてゐるのはその人たちのためではなく、自分のためなのだ。

これはルソーの本質をよく見た言葉だ。――それにしても、このあたり夫人もかなりルソー的になつてゐる。夫人の初期の作風にルソーの調子があるといわれるのも無理はない。

最後に、エミール（十六歳）の宗教教育にうつる。「サヴァ助祭の信仰告白」の段だ。――ルソーは、その精神と心情から、まづ神の存在を信じた。ノ意欲し、行動しうるところのこの存在、それ自體で能動的なこの存在、要する

に、それが何であるかと、宇宙を動かし、萬象を規定するこの存在、これをわたしは神と呼ぶ。……わたしはわたし自身の中に神を感じる、わたしはわたしの周囲のいたるところに神を見る、……」

サア助祭の信仰告白というのは、感情における雄辯の論證における形而上學の、何たる傑作であるう！ ルソーはわたしたちがかくも要求してゐるところの、敬虔な思想を尊重した當代唯一の天才人であつた。

ルソーは人間生得の本能に訴え、そしてこの本能の眞理を理性に向つて證明するために、省察の全力をそそぐ。世上の哲學は、分析や抽象的な思索から生れなかつた、この内的な、自發的な説得を排斥するのだ。

サア助祭の信仰告白は正しい、強力な、深い一聯の推理として賞揚された、そしてこの推理は狂信や無神の徒の混亂のなかで感激をもつて採用せられた語思想の集大成をなしてゐた。しかしながらこの書も、思想史上の一エボツク、あの書物の前ぶれにすぎなかつた。……

あの書物というのは、他でもない、夫人の父ネッケルの著「宗教思想の重要性について」であつて、ちやうど夫人がこの『書簡』を書いた年に出た。――

* *De l'importance des opinions religieuses* (1788)

夫人はこゝでいま一つの偶像崇拜にされる。この書物の作者は、當世紀最大の政治家であり、また地上の守護の天使のやうに人民を愛する博愛主義者であつた。……

許して下さい、ルソーよ、わたしの書はあなたに捧げられたものだ、だのにフト他の人がわたしの崇拜的になつてしまつた。

けれどもルソーだけは、ルソーの人類愛にもえる心だけは、正しくこの人を理解してくれるだろう。ルソーは自分の魂の衝動にしかゆづらない人だ。かれの心にはつまらぬ嫉妬も入らないだろう。そしてルソーがもし生きてゐたら、

わたしがあえてその名をあげない人、わたしがその人に愛の對象のみを見ながら、おそれもなく近づく人、……後世が、この世紀と同じく、天才のあらゆる稱號で呼ぶだろう人、が、わたしの運命と愛が父上と呼ぶことを許してくれる人

を賞讃せずにはゐられないだろう。——といつて夫人はこの項をむすぶ。

書簡 四 ルソーの政治的著作について

ルソーの「社會契約論」*は、周知のやうに、自由民権をうたつたもので、フランス大革命にその指導原理を提供した。人間は自由に生れ、しかもいたるところ鐵鎖の中にある、¹というのが、第一章冒頭の句だ。——

* *Du Contrat Social* (1762)

小さいころから政治や思想に興味をもつてゐた夫人は、こゝではかなりの見識を示してゐる。——

ルソーは、特殊の利益に一般の利益を従屬させるやうなかなる契約も存續すべきではない、一國民がその幸福に反して法律に従うべき事は愚劣だ、國民の同意なくして、いかなる政府も設立あるひは維持せらるべきでないという。またルソーは、世上の一切の權威の根元にさかのぼつて、そして王政といえども、「*la Volonté Générale*」に

よつて設立せられ、國民のみがその變革の權利を有する法律の上に立てられるならば、他のものと均しく正當な、あるひは一層すぐれた政體だと主張する。

けれどもわたしは、ルソーが立法者として自己の代表者をもつ國民を自由と看做さないで、あらゆる個人の總會を要求することについては、あえて批難するだるう、熱狂は感情においては許される、が、立案においては決してそうではない。自由の擁護者たるものは、誇張を差控えねばならない。

と夫人はいう。そのころ夫人はイギリス流の議會政治の支持者であり、夫人の父はルイ十六世の股肱として、久しく閉ざされてゐた三部會を召集しようといふのであつた。

また夫人はルソーとモンテスキュー^{*}を比較して、前者の演繹的な、抽象的な行き方と後者の歸納的な、具體的な行き方とを指摘し、

モンテスキューの方は既成の社會に有益だが、ルソーの方は始めて集らうといふ社會に有益だ。

という。夫人は十六歳のとき既に、「法の精神」の拔萃をつくつてゐたのであつた。

^{*} Montesquieu (1689-1755) *l'Esprit des lois* (1748) の作者。

つぎに夫人はルソーの論理的な面に注目して、

ルソーは觀念の連繋のために、幾何學者の方法を借りる。かれは政治問題を計算に従わせる。かれはその推理によつても、またこの推理の形式によつても同じくかれの頭腦の力を驚嘆させるやうだ。

という。實際ルソーは幾何學も相當にやり、時間をかけるならば、思考能力についても、かなりの自信をもつてゐた。

のだ。ルソーといえば、すぐ感情とか想像とかいわれる中で、夫人が既にこのことをいつてゐるのは面白い。ついでに、夫人は女性としては珍しいクイデオログであつた。

さて、人間の権利を理窟で證明するだけでは十分でない。その権利に附せらるべき價値を人々に感得させねばならないのだ。ルソーの獨壇場はそこにある。萬人をひとしく感動させ、納得させずにやまぬあの雄辯！ これをもつてルソーは萬人の自由を天下に説いた。

わたしはわたしの根本感情のあらゆる力とあらゆる強さから、自由を愛する、人間のあいだに自然によつて印されたもの以外のなんの差別もつけぬこの自由を、……

と夫人も叫ぶ。周知のやうに、夫人はあらゆる意味で第一級の自由愛好者であつた。……とこの時、また同じ自由のもつと強い感情が夫人の思想をうばつてしまふ。三部會召集のことを想ひ出したのだ。――

偉大な國民よ、あなた方の権利について語るために近く召集され、二世紀のうちに自己をふたたび見出して驚き、そしておそろくあらたに獲得した力の行使にまだ慣れてゐないだらう國民よ、……

と夫人は國民大衆に呼びかける。理性を信頼して下さい。二年前からこの王國をさわがせてゐる諸事件は、ついに、諸國民が血の波によつてしか獲得しなかつたところの利益を、人智の進歩にのみ負わせようとしてゐる。どうか運命があなた方の憲法に捺そうとする、道理と平和の印を消さないで下さい。……

ルソーよ、あなたの涙があんなに度々ぬらしたこの地上に、ほとんどあなたを惜しむものもないほど不幸な偉人よ！

あなたはどうしていまフランスが見せようとする崇厳な光景の目撃者でないのか、……あゝ、ルソーよ、あなたの雄辯がこの嚴肅な集會できかれるなら、あなたにとつて何という幸いであるう！ 有益でありたいという希望こそ、才能にとつて何という靈感であるう！

さうだ、ルソーは始めて集合する社會に有益なのだ。そしてこの新社會建設の立役者は、誰あるう、夫人の父その人だつた。――

だから甦つて下さい、おゝルソーよ、……そしてあなたの有効な祈願が、善の完成を目的としながら、惡の極端から出發した人とその仕事において勵ますやうに。……フランスが守護の天使と呼んだ人を、……あなたのやうな審判者、讚美者、市民をもつべきだつた人を。

この人、というのは勿論ネッケル宰相のことだ。ネッケルは一七八八年ふたゝび財務總監となり、事實上の政府首班として第二回貴紳會議をひらき、第三階級の要望をいれて平等の票決法を決定した。そして翌年三、四月にわたつて三部會議員の選舉が行われ、五月五日ついに三部會は一六一四年以來はじめて召集された。夫人のこの祈願はその六ヶ月前のことだ。既にはじまつた大革命の動亂が、はたしてこれに應えたかどうか……

それはともなく、こゝでは夫人の進歩思想にちよつと注意しておこう。夫人も十八世紀の子として、ふかく人間精神の進歩を信じてゐた。そして夫人は進歩、*le Progrès* のことを發展性、*la Perfectionnisme* と呼ぶであらう。(未完)